

---

# 「門限」と「哲学」と「下校時間」

花形 茶屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「門限」と「哲学」と「下校時間」

### 【Nコード】

N8602V

### 【作者名】

花形 茶屋

### 【あらすじ】

友と過ごす青春。切磋琢磨する青春。一心不乱に学ぶ青春。そして、恋多き青春。誰にだって訪れる学生時代。喜怒哀楽辛くも、苦くも、酸っぱくも。時に甘い。これは、そんな少女たちが過ごしたであろう物語である。シリーズ化するは、未定だよ！

## (前書き)

注意事項があります。

- 1 .これは、作者である私が突発的に思いついた何の脈絡もないものです。
- 2 .ぐだぐだです。
- 3 .この物語は学生諸君の平凡な日常を淡々と描くものです。過度な期待はしないでください。

三番目のは、一度言ってみたかったですよ？

簡単に言うと、のほほんとしていまーす

彼女と出会ったのは、有態な夕暮れの教室だった。

「僕はね、とても怖いんだ」

茜色の光が目に入るすべてのものを照らし、染め、ほんのり彼女の頬にも赤みが差しているように見えた。

女の子なのに、一人称が「僕」なんてちよつぱり変な女子だと思っってしまったのが、最初の印象。僕と彼女は、同じクラスに所属していたため、顔自体は何度も見かけていたのだけれど、実際にこうして向かい合って話すのは今回が初めてだった。

黒々とした髪を横一線に切りそろえ、琥珀色の瞳が夕日にきらめき、パツと見た限りどこかのお嬢様風。もしくは市松人形。後ろ髪も前髪も例外なくパツツン。けれど、性格は好奇心旺盛。

別におかしなことじゃない。

学生時代はいろんなものに影響を受けて、ころころと性格が変わるものだと親父がよく言っていた。

けれど、やっぱり彼女は従来の女子に比べれば、少しだけ違ったのだ。

「何のことだよ」

脈絡もなく、ただ「怖い」といった彼女に対し、僕は投げやりな問いかけをする。

そもそも、彼女はどうか知らないけれど、僕は単に忘れ物を取りに来たというだけであって、特別残っていることはないのだ。だから、さつさとこの場から離脱、帰宅してゲームなり、漫画なり、飯を食うなりしたいわけだ。

けれど、彼女にそんな隙は一切なく、むしろよくぞ聞いてくれたとでもいった様子で、こちらに視線を向けた。

「自分の無知に対してさ。君は考えたことはないのかな？ どうしてこんなことが分からないんだ、周りは知っているのに、自分だけ知らないんだと。周囲よりも知識量が劣っていることを感じたことはないかい？」

逆光で、俺から見た彼女の表情は影が差して良く見えない。けれど、やっぱり笑っていたのだろう。

「そんなこといつものことだ。お前は俺がどんな人間かを半年間同じ教室で見て来ただろう。なら説明しなくてもいいよな？」

「うん、確かに君の無知……というより、馬鹿さ加減には一目置くほどの驚きはあったよね」

にやにやと。あるいはけらけらと何処か作り物めいた笑いをもらす彼女。

それは場の雰囲気、そして二人の接し方にも影響を与えた。

「うるせいっ」

俺はこの半年、言ってみれば、教師たちの間から問題児として扱われていたはずだ。

授業中の私語は当たり前。遅刻だって何遍もあったし、忘れ物なんて常識になり始めている。授業の内容は聞かないけれど、さして気にした様子も見せないけれど、テストには問題なし。要は日ごろの態度が悪いだけ。結果はちゃんと残している。

しかし、それが結構一部の教師は煩わしいようだった。クラスの中にもそれを注意する声もあるけれど、至って気にしない。

何しろ、俺は友人関係には恵まれているのだ。

詰まる所、俺という人間は、「憎めない奴」らしいのだ。

不意に、今度は一瞬だけ笑いが漏れた。

見れば、吊り上った口元を片手の握りこぶしで隠すようにして微笑む彼女の視線。

どうやら、彼女もこちらには少なからず好意的な人種らしい。

だが、その笑みも笑いと同じで一瞬。

視線を帳の降り始めた空へと彼女は視線を向けた。

「けれど、さ。そんなの関係ないよ。君がバカやって、それを自覚して尚且つ大して気にした様子はないけれど、それは君の見解だ。僕が無知を怖いと思う事に何ら変わりはないさ。だから、僕は今日も本を読み、人々の会話を盗み聞くのだろうね」

それは何がどうなるうと変わらないうでもいう言い分だった。

けれど、それに対して俺は、

「それって、少しつまらなくないか？」

直感的にそう思う。

「何故かな？ 僕としてはとても退屈しないと思うけど。少なくとも、僕の恐怖は少しくらい和らぐよ」

「いや、そうじゃなくて。お前の話を聞く限り、本を読むのも、人の話を盗み聞くのも全部一人でできちゃうじゃないか。なんつーか、退屈だから？ つまらないんじゃない？ 味気ない？ と思ったからつまらないって言ったんだ」

「まるで何を言い出すんだとでもいうかのような表情を彼女は見せた。

それに対してこちらは、至って当たり前のことを言ったはずなのにという胸中。

「いや、それが悪いことだってわけじゃない。本を読むのは勝手だし、人の話を盗み聞くっていうのは少し言い方が微妙だけど、周りの話を聞いちゃう事なんて普通に誰でもあるだろう？」

本を読むことは、事故の認識を広げるためだし、人の話を聞くことも同じ。

誰もしそうな当たり前なこと。

誰でもできる当然なことであるから、僕は言うのだろう。

いつかは誰もが気が付くことを。

「でもさ、独りじゃできる事に限りがあるだろう」

一人できる事は限界がある。

それは何に対してもそうだろう。

彼女の求める者は、叡智。自分が何も不安に思う事のないだけの知識を得て、誰に対しても疑問を持たないだけの知恵。

だが、それにも限界はある。一人で本を読む解く事にも、一人で情報を収集することにも。

本を読解した時、それは彼女の身の見解。過去の偉人の意見をまとめたとしてもそれは過去であり、現代の参考にはならない。

情報収集した後、それを解析した結果も同じだ。彼女の身の見識では、見えてくるものは狭く、こだわりのあるものになってしまう。しかし、彼女はそれに気づいているようでも、敢えて見ないようにして答えた。

「……そうかな、本の知識は君が思ってる以上に広いと思うよ。何しろ過去の偉人から現代の人の考えを物語などから追想できるからね」

「でも、それって結局はちょっとだけじゃん」

自分の言い分が通らないとなると、彼女は少しむすっとした様子で、

「何が言いたいのかな」

「だから、本物に勝るものはないってことだよ。物語は所詮物語。フィクションはノンフィクションより幻想めいているし、ノンフィクションだってリアルを完全に表現できない。と言ってもそれは人の感度によりものだから、これも絶対とは言えない」

「じゃあ、どうしろって？」

「実体験に勝るものはなし」

その意見に、彼女はいつの間にかにしていた緊張を解いた。がっくりと肩を落として、あからさまな疲労を見せている。

「……参考にならないね。生憎だけど僕は人

と遊んだことのない人間だから」

「じゃあ、遊べば？」

「友人が少ないんだ」

「作ればいいじゃん。てか、半年間何してたんだ」

高校入学を果たした新入生。

しかし、早くも六月も終わろうとしている。あと半月も知れば、夏休みだという状況。友人の一人、二人、至っておかしくないはずだろうに。

だが、それだというに、彼女は、何を愚問なことをとでもいうかのように両肩を上下させる。

「叡智を蓄えてた」

うわ、何こいつ。どこの文学少女だよ。死後化けて出たら、生前は本を食べていたんだと噂を広めてやろう。

「つーか、本当に何してたよ、お前」

「………文句ばかりだな、君は。そもそも君は此処に何しに来たんだい。もう下校時刻はとっくに過ぎてるじゃないか。親御さんが心配するよ」

「高校生になつて、帰宅時間が乱れたくらいなんでもないだろう。」

「つーか、それぐらいで騒がれても有難迷惑だ」

「そうかな。僕は結構心配されるんだけどね」

まあ、確かにこんな少し嫌味を利かせた性格をしていたところで、女子だし、父親とかがからしたら心配するか。

それに女子高生になつたばかりで、浮かれていると思われるんだろうし。

「ふーん、過保護なんか？」

どうせ、父親がうざいとかいう返答が返ってくるのだろうと思っ  
ていると、

「うん。主に知世が喧しい。この前も夜暗くなって帰ったらお説教  
された」

どうやら、父親よりも過保護な家族がいるようだ。



名前から察するに、女性だと思うが。

「過保護な家族だな。口ぶりからして妹かなんか？」

「いや、家政婦さん」

「家族ですらないっ！？ それよりも家政婦なんているのか、おまえんち」

どっか浮世離れた奴だとは思っていたが、どうやら相当自分との生活に差があるようだ。

「知世はもはや、家族よりも家族らしい過保護っぷりです」

「ほう。あれ、でもなぜに呼び捨てなんだよ。年長者には敬語だろ」

「いや、知世は年下の従姉妹だよ」

「年下なのに家政婦なのかっ！？ つーかそれは家族だよ！！ つ

ーか、さっきお前説教されたって言った、よな？ 実際、その子何歳だ？」

「知世？ 来月で11歳」

「10歳児に説教される高校生なんて見たことないよっ！！」

「えー、でも可愛いよ？」

「知世ちゃんに問題があるんじゃない！ お前に問題があるんだよ！ 帰宅時間が遅くなった高校生とそれを叱る小学生の凶なんて、とてもじゃないけどシチュールすぎる！ っていうか、年上の従姉妹としての威厳とかはないのか」

「いいじゃん。だって、黒のワンピースに白のエプロン付けてメイドさんの真似事する女の子が腰に手を当ててぶりぶり怒ってるんだよ？」

「さも、それが当たり前のように言うなよ！ いや、確かに可愛いかもしれないが、そういうもんじゃないだろう。ああ、何だかその知世って子がかわいそうに思えてくるぞ」

「ああいうのが、萌えていうんだろうね。思わず抱きしめてお昼寝したくなるんだよねー、前にしたら、恥ずかしそうに赤くなってるところもまた可愛くってさー」

「自重しろよ！？ 気持ち悪いぞ」

「む。そんなことないよ、知世はとっても明るく可愛いみんなの人氣者！」

「知世ちゃんじゃねえよ！！ お真のこと言ってるの！ それに不憫だって言ってるんだ。心配して怒ってる自分をまさか相手が面白可愛いと思ってるなんて知ったら、絶対怒るに決まってるじゃんか」「そうかな？ 僕としては、その怒ってる姿をも愛でるけどね」

駄目だ。

こいつ少しも抑える気がねえ。

ちつとばかりおかしなやつだと思っていたが、ここまで俺の常識と差を作られちゃあ、どうすることもできねえ。

「……………思ったけど、お前、実際はあんまりそんな無知について考えてないな？」

直感的にそういうと、まるで時間も空気も凍ったかのように、ピシッと言った効果音でも響きそうな停止。

「……………」

二人の間に結構な魔が開いたところで、取り繕ったようにそいつは言い出した。

「……………な、何を言ってるのかな？ 意味が解らないよ。だって、考えてみてごらん、何もわかってないのに、話が進んでるんだよ？ 知らない間に世界のどこかで僕らを巻き込んだ戦争でも企てるのかと思うと恐怖で眠れないじゃないか？ もしくは、死ぬ間際の瞬間や死んだ瞬間、死後のことを考えると不安で仕方がないよ。君だってそうじゃないかい？」

慌てた様に、不味いことがバレた天才が変に誤魔化そうとするかのような。自分でもおかしなたとえだと思うが、いろいろ知ってるからこそ、言い訳の時の墓穴を掘りやすいというのだろうか、言い訳をしようとして、余計なことまで喋っていた。

「少なくとも、戦争云々はお前の被害妄想」

「なっ」

「死ぬことだって、考える必要ねえ」

「What?」

「だって、そうだろう。死ぬんだ。それで終わりだ。それ以上考える必要ねえよ。死んだら、何もなし、何もできねえ。お前のはただの不安。そりゃあ、少しは誰もが持つてるもんだよ。けど、みんな持つてんだ。なら、それは当たり前のことなんだろうよ」

「でも」

「いいか？ よく聞け」

「何だい」

「忘れる、バカ」

「なっ!?!」

「無知が怖いとか、死ぬのが怖いとか。まったく、もっとバカになれ。そうすりゃ、少しは生きやすいだろうよ。少なくとも俺はそうだ。そんな余計なこと考えてねえよ」

「なら、君は今自分のことをバカと認めたってことだよな」

「うぐっ」

「かっかっかっ」

「.....おまえ」

「何かな？ 怒ってるのかな？」

「笑い方が年寄り臭い」

「はあああ？」

「んだよ」

「君は有ろうことがぴちぴちの女子高生に対して婆臭いと言ったのか!?!」

「いや、「ぴちぴちの」っていう時点で今を感じねえよ」

「な、なななな、なんて失礼な!」

「どつでもいいけどさ。もう帰んね？ 月がきれいなんだけど」  
「え？」

「う、うわあああああああつ、知世に怒られるううつ！！」

「結局心配するところがそこなのかよ！」

その後、何故か彼女の家まで同行することになったのだった。

なんでもここまで帰宅が遅くなったことはないらしく、自分にも言い訳を考えろと。もしくは言い訳のために利用されるという。

結果的に彼女の恐れるお子鬼ちゃんは、一時的に怒りを鎮めただけで、翌日説教された。

蝉の声喧しく、じめつとした梅雨明けの初夏のこと。

実際は年下の少女の雷に怯えて、言い訳役の自分は彼女に半ば引きずられていくような形の下校だったが。

月明かりのもと、早足で女子と下校するなんていう、そこそこの青い時代の香りを感じた日だった。

(後書き)

FB文庫にて「ショートシリーズ 3分間のボーイ・ミーツ・ガール」というものが発売しましたね。ご存知ですかね？

ファンタジー系を愛読する私ですけど、これは普通の日常的なけれど、ふっと笑ってしまうような出会いだったり、すれ違いが収録されているのです。面白いですよ？

そういえば、公式サイトにも掲載されていましたね。

その時から好きな作品です。この本にもその時のがいくつか乗っていますしね。

少年と少女の出会い。

それだけでも学生時代を連想させます。

まあ、ボーイ・ミーツ・ガールとくれば、「学生」「校舎」「すれ違い」と想像できるのですが、一番は「波乱万丈」といった感じですかね。

そういう私もうまくいかないことばかりでした。

ともかく、今作品はこれに影響されたというわけでもあるのですよ。

もし、ふと、こんなことあるかもしれない、うんこれは面白くなってきたと書き続けることができたならば、次回があるかもですね。

その時はお読みくださいませ。

では、悪しからず。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8602v/>

---

「門限」と「哲学」と「下校時間」

2011年8月18日03時28分発行